

寂寥山大吉寺は、浅井町大字野瀬の天吉寺山上にあった天台宗寺院である。野瀬の集落から北東約二キロの位置にあり、標高は約七百五十メートル付近の平坦部にある。古代から中世に至つて繁栄したこの寺は、信長の兵火により荒廃し、江戸時代にはその子坊三院二坊が残るのみとなっていた。野瀬から山上の寺跡に登る途中の一子坊跡に、現在の大吉寺が建つている。

かつて天智天皇の時代に、愛知川の上流に聖観音に似た「浮木」があった。桓武天皇の時代に、これを安置して天吉寺という寺院を建立した。その場所は、栗津（現在の大津市内）辺りと云う。ところが、大同一年（八〇七）の夏に洪水があり、寺は流れ本尊のみ波にのって高島郡に流れいた。これを安閑なる僧が、旦那の浅井治家と共に取り上げ、草野の天吉寺山（現在地）に祀ったとされる。また、この洪水は延暦九年（七八〇）のこととも言われ、流された寺守額の

「天」の「一」の字がとれて、現在の大吉寺という寺号になつたといふ話も伝わる。

『古事記』という本がある。鎌倉幕府によつて編纂された歴史書で、その史料的価値も高いとされる。その文治三年（一一八七）一月の条に次のように記されている。

〔大田定康といふ〕関東の功士が、平清盛の時代に源氏方との理由で近江國の所領を没収されてしまつた。さらに、平家滅亡の後は、近江国守護佐々木定綱によつて兵糧米を出す領地として所領を占拠されている。この度、鎌倉に参上し、その所領を訴えてきたので、源頼朝の命令としてその所領を元に戻す様に判決が出された。

『古事記』では、定康が「関東の功士」と言われる所以も述べられている。平治元年（一一八一）五月十九日、頼朝の父である源義朝は、平清盛と平治の乱で戦つて破れた。義朝は美濃から関東方面に逃れようとしたが、寒風が肌をつき、雪が進路を阻み、その逃避行は困難を極めた。現在も山上の大吉寺跡には源頼朝供養塔があ

大吉寺の歴史

—鎌倉・室町幕府と共に歩んだ天台宗寺院—

長浜城歴史博物館 学芸担当主幹

太田 浩司



草野川の上流域を「上草野」という。旧上草野村の範囲を指すもので、川の左岸沿い、南から西へ谷、鍛冶屋、郷野、野瀬と集落が続き、その先は右岸に太田、西村、寺師を経て高山に至る。左岸側は、草野の集落があつて高山に至る。平安時代後期の歴史書に、草野姓の豪族と源頼朝との逸話の記述が見られ、古くから地域の呼び名として「草野」は存在していたのだろう。

岡谷から南を「下草野」、七尾山系の東側にあたる谷筋の、伊吹町下板並、上板並、吉坂、甲賀、曲谷、甲津原を総称して「東草野」と呼んだ。上草野とは山を隔てても活発な往来があったようだ、北東近江の東西交通の要衝だった上草野からは、東へ西へと伸びるいくつかの道がある。



◀おサルも通る七曲峠の道（サルの姿は捉えられず…）。

峠・坂道・曲がり道

姉川渉

谷坂

夏草が目に眩しく生い茂り、風が尾根を越えていく。忙しく鳴いているのは不如帰か。深い谷の底からかすかな水音。聞こえるのはそれだけ。静寂の中を、希に、本当に希に、無粹な重く低いエンジン音が喘ぐように坂道を越えていく…。

上草野の鍛冶屋から山塊を越えて東草野の吉根にいたるこの道は、通称「七曲り」と呼ばれる羊腸の小径。今では、峰越連絡林道七曲線という味気ない名が正式名称となっている。

この道、教如上人が真宗布教のため艱難辛苦をきわめた道であり、関ヶ原の合戦に破れた石田

谷坂トンネルから谷坂道

鍛冶屋の北隣の集落、郷野から、天下橋を通つて草野川を跨ぐ。ここから西へ西山を越え、小室の集落にいたる峠道、谷坂。地元の人は「たんざか」と呼ぶ。

上草野は耕作地が少なく、多くの百姓は下草野や田根（現在の浅井北小学校区）、内保といった所に田圃をもつていた。車もない時代、大八車を曳いて往復するだけでも大変な時間がかかるため、繁忙期には田小屋と呼ばれる小屋で暮らしながら米づくりをした。少し高台から小室、八島方面を望めば、広がる水田の中に田小屋が点在する風景があつた。畦道のハンノキ、ハンノキに飛来するおびただしい数の白鷺とともに湖北特有の風景を形成していたのに、圃場整備によつてそれは消えた。

谷坂道は、この風景に至る道、出づくりの人々が大八車を曳きながら上り下りした道である。

*

その西山越えが、トンネルの開通によつて解消されたのは、昭和八年のことだつた。大阪の新聞社の飛行機がビラをまきながら飛んでいたのを、昨日のことのように覚えています。トンネルを掘っている様子も、峠を越えて見に行つたもんです。ようけの人が



▲谷坂隧道の開通に尽力した上草野村村長・小林外藏（上）と田根村村長・柴田孫太郎（「谷坂隧道竣工記念写真帖」より）

▲トンネル開通の様子を語る青井経夫さん

行なわれた。

昭和八年、ようやく取り付け道路から着工となり、同九年隧道に着手、昭和十年三月貫通し、その秋十一月、盛大な開通式が行なわれた。この事業に挑んだ上草野村村長・小林外藏、田根村村長・柴田孫太郎ら、多くの人々の労苦が報われた晴れの日だつた。奉祝アーチで飾られた祝賀会場には多くの人々が訪れ、夜は花火が打ち上げられた。

「谷坂隧道が開通したのは、私が小学校一年のときでした。大阪の新聞社の飛行機がビラをまきながら飛んでいたのを、昨日のことのように覚えています。トンネルを掘っている様子も、峠を越えて見に行つたもんです。ようけの人が

東草野から見れば、峠の向こうは、華やいだ都にも匹敵する夢の地であったかも知れない。現に、上草野生まれの私にしても「長浜」は憧れの地であり、「長浜へ行く」ことは、幼心に大きな夢でもあった。

▲吉瀬に出ると、伊吹山がすぐそこに見える。